早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

ラオス競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係：ヴィエンチャンの事例から

A Relationship between Tradition and Sports in Boat Racing Festival in Laos: The Case Study in Vientiane

２０１５年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
橋本　彩
HASHIMOTO, Sayaka

研究指導教員：　蔵持　不三也　教授

競渡もしくは競舟を含んだ祭礼は様々な名称のもと、東アジアから東南アジアにかけて広くおこなわれており、その祭りの由来や機能的意味、神話・伝説との連続性、宗教性、象徴性などが、主に民俗学者や文化人類学者によって、19 世紀後半から 20 世紀にかけて明らかにされてきた。21 世紀に入ると、それら研究者による競漕祭の研究は極端に減り、「スポーツ」という視点をもったスポーツ人類学者、スポーツ史家たちの研究へと変わっていく。彼らの共通した関心の一つが、競漕祭にみられる「伝統」と「スポーツ」の関係性であるのだが、地域社会との相互作用の中で、どのような歴史的変容を経て、競漕祭が「伝統化」もしくは「スポーツ化」されるのかという点に関して、いくつかの課題が残されている。

本研究では、ラオス人民民主共和国において毎年雨季明けに開催される競漕祭の歴史的変容ならびに、その変容過程にみられる「伝統」と「スポーツ」の関係について、首都ヴィエンチャンのワット・チャン競漕祭を事例として研究を行ない、先行研究にて残された課題を含め、両者の関係を明らかにしている。

本事例においては、時代に応じてその捉え方に変容がみられるため、第 3 章以降、時代を区分し、時系列に沿って競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係を考察している。

ワット・チャン競漕祭は、ヴィエンチャンの中心部で開催される年中行事であるが、ヴィエンチャンの歴史的背景を考慮すると、その行事の歴史はラオスにフランス人が入植して以降、1940 年代に展開されたラオス刷新運動期に創られた可能性の高いことが第 3 章「フランス植民地時代（1893 年から 1945 年）」で述べられている。ラオス刷新運動期はヴィシー政権の「伝統の復興」と「青年・スポーツ運動」の影響を受けた活動がさまざまに展開されたが、競漕祭の中で「スポーツ」が鼓舞された様子はなく、むしろ競漕祭は、文化的な祭りとしてラオス人のアイデンティティを喚起する伝統復興の一部であったと言える。

第 4 章「ラオス王国独立後の競漕祭（1953 年から 1965 年）」では、1972 年に出版された『ラオスにおける舟競漕：ある文化複合』の著者であるアルシャンボーが調査をおこなった 1950 年代の時代背景を概括したのち、彼が記録をした 1953 年のヴィエンチャンの儀礼を再検討している。３章の流れを受けると、アルシャンボーが観察したヴィエンチャン地域を守護するナーガたちを召喚する儀礼の句は、伝統復興により蓄積された知識が構成され、おそらく 1940 年代後半に創られたものと考えられる。これが 1974 年まで競漕祭の中心的儀礼として繰り返される中で、儀礼は「学識ある伝統」ならびに「学識者内で伝わる伝統」として、ワット・チャン競漕祭の「伝統的」側面を形づくっていったと言える。また、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて、ルアンパバーンから皇太子夫妻が競漕祭に参列することにより、競漕祭の伝統は権威付けされていく。

競漕祭と「スポーツ」との接合に関しては、第 5 章「内戦下の競漕祭（1965 年から 1974

年)」から第6章「ラオス人民民主共和国の成立からラオス観光年まで（1975 年から 1999 年)」、第7章「21 世紀のワット・チャン競漕祭：伝統論争とそのゆくえ 」で扱っている。

アメリカの影響が強まった 1960 年代半ばより、競漕祭における競漕をスポーツとみなす視点が確認され、1965 年にスポーツを表す「キッラー」と競漕を表す「スワン・フア」を合わせた「キッラー・スワン・フア」という造語が出現している。1971 年には「キッラー・スワン・フア」は「キッラー・パペニー」すなわち「伝統スポーツ」であると述べられるようになっていく。こうした「スポーツ」と競漕祭の接合は、王国政府時代においては、恥ずべき風習として卑猥なお囃子が外国人の目を気にして禁止されたのに対し、「スポーツ」という概念は、外国人の目にもラオスの伝統的文化の中に外国と同様の「高度な文化」が存在することを示していたため、忌避されるものではなかった。

1975年に王制が廃止され、社会主義政権が誕生すると、団結を鼓舞する新政権によって競漕祭は「水上の団体スポーツである」と繰り返し主張されるようになり、競漕祭における競漕は「スポーツ」の色を深めると共に、拡大の道をたどっていく。1985年開催の第1回国家スポーツ競技会で競漕が競技の一種目とされると、その後も東南アジア競技会などの国際大会の競漕種目と競漕祭の競漕は接合していくこととなり、更に「スポーツ」としての側面を強めていった。一方で、こうした競漕祭に対し、観光年を迎えた1999年には、伝統回帰の動きがみられるようになる。そして、競漕祭における伝統は、舟の形状へと集約され、伝統に則った「伝統舟」と伝統的ではない舟＝「スポーツ舟」とに競漕祭の競漕カテゴリーは分化されていった。伝統回帰の中においても、競漕祭は「伝統」でもあり「スポーツ」でもあるという状況が舟のカテゴリー分化にも表象される結果となっている。

以上の歴史的変容から本研究における考察の結論として、「おわりに」で以下を結びとしている。

ワット・チャン競漕祭における「伝統」は、そもそもフランス人もしくは首都ヴィエンチャンに移住してきた他地域のラオ人たちよって徐々に構成されていったものであると言えるが、年中行事として毎年繰り返されることでヴィエンチャンの伝統行事として定着していった。そしてその伝統行事は、ヴィエンチャンが首都であるという立地も影響し、常に外の目を意識した展開を見せる。競漕祭は時として「伝統」であり「スポーツ」でもあるため、時代に応じた彼らの主張は揺らぎをみせるが、両方の側面を持つ行事であるからこそ、常にラオス人の関心を集めてきた。そして、時として「スポーツ」が対立軸にあることで、「伝統行事」としての意味合いを深めていったと言える。一方で、国際的なスポーツ競技会などの場では、1970年代初頭と同じく、競漕祭の「伝統」と「スポーツ」は対立しない形でラオスの伝統的なスポーツとされ、対外的にアピールされていく。